

## アイヌ口承文芸にあらわれる植物および植物神について

本 田 優 子

目次	はじめに
I	口承文芸資料の資料性
II	口承文芸資料にあらわれる植物と植物神
III	各ジャンルにおける植物神のあらわれ方
	おわりに

### はじめに

かつてのアイヌ民族の世界観の中で、植物はどのような存在として認識されていたのか。一方、現実の生活において個々の植物はどのように利用されてきたのか。そして、両者の間にはどのような関係があるのか。これは、筆者がアイヌ語やアイヌ文化との関わりを持つようになってから、漠然と、しかし一貫して抱いてきた問題意識である。例えば、基本的には殺戮を前提とする動物利用とは異なり、根や種子を保護しつつ採取することのできる植物利用に対して、アイヌの世界観の根底をなすといわれる「送り」の概念はどのような位置づけにあるのかを始め、整理されていない点は実に多い。

従来、アイヌ文化の中でも植物に関しては、もっぱら現代の植物学的方法論に基づく同定作業、アイヌ語名称の確認、さらに具体的な利用法等の生活誌的側面で調査研究が進められてきた。これに対して知里真志保は「(動物名称調査に比べて一本田)植物名の調査に於てわ、我々は寧ろ恵まれた状態にある」<sup>(1)</sup>と一定の評価を与えつつも、「同定のまちがい」や「アイヌ語法の無視」などいくつかの点で厳しい批判を行っている。

一方で従来の研究には、アイヌの世界観に拘泥し、植物に関する実学的な研究をおろそかにしてきたという側面もみられる。たとえば『アイヌ民族誌』<sup>(2)</sup>は800ページの大著であるが、植物利用の中でも非常に重要な領域であるはずの薬用植物についての記述はほとんど皆無であり、疾病治療に関しては病魔祓いを中心とするわずか数ページの叙述が記載されているのみである。むし

(1) 知里真志保『分類アイヌ語辞典』第1巻植物篇、日本常民文化研究所、1953年。

(2) アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』第一法規出版、1969年。

ろ直接のアイヌ研究とは距離をおいたところで行われた研究にみるべきものがあるように思う<sup>(3)</sup>。もちろん『アイヌの疾病とその治療法に関する研究』<sup>(4)</sup>等の意欲的な文献も刊行されているが、系統的継続的な研究として発表されているものはほとんどない。

その意味で、いまだにこの分野における研究の到達水準を示しているといえるのは、知里真志保の『分類アイヌ語辞典』(第1巻植物篇)<sup>(5)</sup>であろう。この労作には、植物のアイヌ語名称や利用法のみならず、知里の口承文芸あるいは宗教儀礼に関する膨大な知見に裏打ちされた情報が随所に盛り込まれている。しかし、それでもやはりそれらは少数の限られた植物に関する補完的情報にすぎず、そこから植物をめぐるアイヌの世界観の全体像を読みとることは困難である。

“アイヌは自然界のあらゆるものに神性を認める世界観を有する”という定義は一般に広く流布している。しかし、実際には全ての植物が神として認識されているわけではないし、同一の植物に対しても、一般的な道具の材料として用いる場合と、墓標など精神性の強い局面で利用される場合とでは、神性を認める度合いは異なってくる。どの植物がどのような状況で神とみなされ、それはいかなる特性に基づくものなのかを把握して初めて、アイヌの植物認識の全貌が見えてくるように思う。

以上のような大きなテーマにとりかかる最初のステップとして、本稿では口承文芸資料を対象を絞って考察を加えることにした。自然界に存在する無数の植物のうち、アイヌの日常生活に関わりの深いものにはアイヌ語の名前が付けられているが、その中でも特に意識されるもののみが口承文芸の中に登場する。さらにそのうち、いくつかの植物は人格を有する植物神としてストーリー構成に深く関わってくる。それゆえ、このような口承文芸中の植物のあらわれ方について検証することにより、植物をめぐるアイヌの世界観の一つの部分を整理することが可能ではないかと考えたのである。

そのためにはまず、1)口承文芸とはどのような特徴を持つ資料なのか、2)資料として利用する場合にはどのような点に留意しなければならないか、という二つの側面についてそれぞれ理解を深める必要がある。本稿ではオオウバユリの起源説話を例にとりながら、これらの点を考察してみたい。

次に、口承文芸資料には、具体的にどのような植物が人格を有した植物神として登場しているかを確認してみる。その前提となる作業として、口承文芸中にあらわれる全ての植物について、役割や出現のしかた、文献名、伝承者名、ジャンル等、38項目に類別したデータベースを作成した。これまでに利用した文献のリストは巻末に示したとおりであり、データ総数は1,803件である。現段階では公刊されている全ての資料に目を通すには至っていないが、ある程度全体的な傾向をおさえることは可能であるように思う。

そしてそのようなデータに基づき、口承文芸資料のジャンルごとに植物神の出現の仕方について検証し、ある仮説を述べてみたい。

(3) たとえば『北海道薬物誌』(北海道庁警察部、1914年)や『蝦夷地の医療』(札幌医史学研究会編、北海道出版企画センター、1988年)など。

(4) 木下良裕『アイヌの疾病とその治療法に関する研究』(トヨタ財団助成研究報告書)、1983年。

(5) 知里真志保前掲書、1953年。

## I 口承文芸資料の資料性

まず初めに、口承文芸の資料性について考察してみる。口承文芸中には、食材、建築材、儀礼にかかわる道具材、日常用具材等、実に様々な役割を担いつつ植物が登場している。しかし、そのような場合でも、調理法や加工法、あるいは栽培法等、いわゆるレシピ的な叙述は、実はそれほど多いとはいえない。

代表的な叙述例としてあげられるのは以下のようなものである。

織田ステノ「タモギタケの話」<sup>(6)</sup>

ユクピイエフカムイピイエフ

鹿の脂肉、熊の脂肉

yukpiyep-kamuypiyep

アヌコタタイネ スオッケアオマレイネ

一緒に切り刻んで鍋の中へ入れ

an-ukotata-ine suoske-a-omare-ine

ネカルシアンマルマルワ

そのキノコは小さく解して

ne-karus-an-marumaru-wa

スオッケアン。

鍋へ入れました。

suoskean

織田ステノ「いもの神さまが人間にいもを授けた話」<sup>(7)</sup>

赤いものと白いものと紫のもの種分けて／ 播き方はこう／ 畑起こして筋切って[うね立てて]  
こう／ 播いて土かけて／ 草取ったら、一回草取ってから／ 伸びたら、こう土盛って／ 花咲いた、花おさまったら／ もうすぐ食べれるって／ 神さまに教え(られ)て／

(原文は／で改行、[] () ママ)

織田ステノ「豆の神さまが人間に豆を授けた話」<sup>(8)</sup>

手柴 [つるをからませる棒] 切って、二粒三粒ずつ／ 手柴に播いたら／ もう手柴、一本の手柴でも／ 大勢の家内でも一回食べるくらい豆／ ささげ豆なるんだから、それ播いて…／

(原文は／で改行、[] …ママ)

(6) 織田ステノ「タモギタケの話」『人々の物語』、アイヌ無形文化伝承保存会編、1983年、22頁。

(7) 古原敏弘「ウエベケレーアイヌの口承文芸—食べものについての物語」萩中美枝他『聞き書 アイヌの食事』農山漁村文化協会、1992年、247頁。

(8) 同前、297頁。

一読してわかるようにいずれも非常に簡単な説明であり、しかも同一の伝承者によるものだが、これらを代表例としてあげなければならないほど口承文芸全体の中でこのような叙述は少ないといえる。

ところが、例外的なものとして、以下のような非常に詳しい描写がある。

金成マツ (筆録) 「かさぶたの女神」

…本当にありがたいことだと、人々はいねいに私に向かってオンカミを繰り返しました。

それから妻がウバユリの女神から夢で教えられたとおり、ウバユリを人々に見せながらつくり方を教えました。山から掘ってきて根茎をひとつひとつはがし、水できれいに洗ってから臼にいれてつき砕き、それをざるでこす。こしたものを沈澱させると澱粉もとれる。澱粉をとった残りは、たくさん刈り取ってきた青草の中に入れて発酵させてから、臼について大きな団子にして干すと、冬でもいつでも食べられることなど詳しく教えました。<sup>(9)</sup>

これは、金成マツ筆録のいわゆる「金成ノート」と呼ばれる膨大な口承文芸資料から、萱野茂氏が散文説話を4編選び、日本語訳したものの一つである。従来から起源説話としてはよく知られており、アイヌと植物の関係を論じた他の文献にもしばしば引用されている<sup>(10)</sup>。

このオオウバユリの説話だけが植物の加工法を詳述している理由を探るために、アイヌ語原文の記述に立ちかえて検討してみることにした。「金成ノート」は現在、平取町二風谷在住の萱野茂二風谷アイヌ資料館内に保管されているが、そのマイクロフィルムが北海道立図書館に収蔵されているので、ここでは一般に利用しやすいマイクロフィルム資料の方を用いた。

それによると「かさぶたの女神」のアイヌ語原文資料は「shine eshuko pitche retar chima koeyanrashne menoko moshirpa wano ek uwepeker (一人の白い瘡ぶたのある女が東の方から来る昔話)」<sup>(11)</sup>である。以下は金成マツのアイヌ語原文において、「かさぶたの女神」中のオオウバユリの加工法が述べられている部分に対応すると思われる箇所アイヌ語および筆者による日本語訳である。

ne ashkai hawe ne ari hawokai kane	(育つことが) できるのだと言いながら
tu wan onkami re wan onkami u	二十の礼拝、三十の礼拝
ka kushteba tap orowa inne utar	繰り返した。その後、多くの人々に
nea turep kamui anukare a kusu	そのオオウバユリの神を私が見せると
kanna sui eashka uko iyokunnu	再びたいへん驚き合い
reba tapkorachi okai mun anak	このような草は

(9) 萱野茂『炎の馬 アイヌ民話集』、すずさわ書店、1977年、98頁。

(10) 例えば、山田孝子『アイヌの世界観』、講談社、1994年、142頁。福岡イト子『アイヌ植物誌』、草風館、1995年、20頁など。

(11) 金成マツ『金成マツ筆録ユーカラ・ノート』北海道立図書館所蔵マイクロフィルム HM407(8)。『炎の馬』には、昭和7年筆録と記されているが(98頁)、マイクロ資料では昭和6年8月7日の日付になっている。

ne akoro kotan kimun iwori e	私の村の山奥の猟場に
shik ruwe ne ari hawe okai kane	いっぱいあると言いながら
ene akar wa haruhu akar __uni <sup>(12)</sup>	こうやって食糧を作るように、
i obittano Akoro katkemat turep	皆に私の妻がオオウバユリの
tonomat orowa no Aebakashnui	女神から教えられた
korachi inne katkemat utara	ようにたくさんの奥様方
hene autari obittano ebakashnu	など私の仲間に全て教え、
orowa Inau ari Sake ari turep tono	それからイノウや酒でオオウバユリの
mat kamui orun oman kunine	女神が神の国へ行けるように

ここからわかるように、金成マツによるアイヌ語原文には、オオウバユリの加工法に関する記述は一切ない。また、ウバユリの女神が夢の中で加工法を教えたという場面にも、そのような記述は見あたらなかった。

ところで、この説話の類話として知里真志保が紹介している「糞を食はせつつ来る女」<sup>(13)</sup>があり、その中にもオオウバユリの加工法に関する以下のような記述がある。

そこで幾度も手を揉んで礼拝し、妻と共に里川に沿って行って見ると、言ふが如くオオウバユリと称するもの・ギャウジャンニクと称するものが地面を蔽うて見渡す限り繁茂して居た。そこで妻と一緒にこだいっぱいオオウバユリの根やギャウジャンニクを採って来て、オオウバユリの根は臼で搗いて澱粉を取り、残った粕は乾して団子にした。

この説話の方にはオオウバユリの女神だけでなくギョウジャンニクの女神も登場するが、ストーリーはほとんど同じであり、加工法についてはオオウバユリに関する記述だけである。知里真志保の研究ノートも『知里ノート』として、北海道立図書館にマイクロフィルム資料およびコピー資料が収められている。しかし金成マツのノートほど目録が整備されていないことや、知里真志保の著作にはこの説話の伝承者についての記載がないことなどから、確認のための作業は多少時間のかかるものとなった。

その結果「糞を食はせつつ来る女」のアイヌ語原文は、同じく金成マツ筆録の「moshiriba wano shine pon rupne mat osomawa eyar koro ek」<sup>(14)</sup>であることが判明した。以下は、オオウバユ

(12) 下線部はかすれているためはっきり読みとれない。しかし、わずかにみえる斜線などからkだと判断し、kuni(〜ように)に対応する日本語訳をつけた。

(13) 知里真志保「説話掌篇集」『知里真志保著作集』2、平凡社、1973年、432頁。または同『分類アイヌ語辞典』第1巻植物篇、日本常民文化研究所、1953年、200頁。なお、前者の巻末解題には「アイヌがオオウバユリやギョウジャンニクを主食としていた時代を暗示する説話と言われる。農業の起源にからんで粟の輸入を想定させる話には、本著作集第1巻所収の『アイヌの神謡(一)』の第16話がある」との記述があるが、第16話は「粟」ではなく「粟」の起源説話である。当然、農耕の起源に関わる伝承ではないことを参考までに記しておく。

(14) 知里真志保『知里ノート』北海道立図書館所蔵マイクロフィルム HM459(123)なお『知里ノート』には、この金成マツのアイヌ語原文を知里真志保が筆写した資料(コピー資料No.56)もあり、知里による修正箇所がかなり見られる。

りの加工について書かれている部分のアイヌ語および筆者による日本語訳である。

turep ta an rupne saranip shik	(二人で) ウバユリを掘り、大きな袋にいっばいにして
kane Asewa sap an orowano Akor	背負って下りました。それから私の
katkemat turep uta irup kara	妻はウバユリを搗いて澱粉を採り
nei shichihhi onka irup shito	その繊維は発酵させて澱粉団子
kara wa Aeko sonno uweebaki	を作って食べると、本当にだんだん
ta keraan usa bukusa haru	おいしくなり、いろいろ行者にんにくの食糧を

アイヌ語文中、「shichihhi onka」部分の下線は、他の箇所書き込み等と照合し、おそらく知里真志保によるものと思われるが、金成マツのアイヌ語原文に、オオウバユリの発酵について述べた箇所が存在しているにもかかわらず、「糞を食はせつつ来る女」の方で「その繊維を発酵させる」という日本語訳を省略した知里の意図ははっきりしない。

しかし一般にオオウバユリの加工法について詳しく述べていると考えられている「かさぶたの女神」の方のアイヌ語原文には、そのような叙述は一切無く、発酵過程が記述されていない「糞を食はせつつ来る女」のアイヌ語原文の方で、発酵について言及されているという点は、和訳資料を利用する際に留意すべき問題を示唆している。

なお、この起源説話には類話がこの他に二つある。一つは葛野辰次郎氏によって語られた資料<sup>(15)</sup>であり、録音テープを聞いて確認したところ、やはり加工法等の詳しい情報は語られていない。他の一つは和訳資料であるが、やはり同様である。<sup>(16)</sup>

いずれにせよ、口承文芸資料の中から植物の利用法、加工法等の諸データを大量にかつストレートに得ることを期待するのは基本的に困難であり、逆にそのような叙述に対しては資料の批判的な検討が欠かせないということを認識する必要がある。

## II 口承文芸資料にあらわれる植物と植物神

次に、口承文芸資料中には、具体的にどのような植物や植物神が出現するか確認してみたい。

これまでの作業で確認できた、口承文芸に出現する植物の総数は148種類<sup>(17)</sup>である。この中には、植物の総称(木、草、穀物など)や加工品名(麴、ござなど)は含まれない。知里の『分類アイヌ語辞典』(第1巻植物篇)に項目として掲載されている植物数は472種であるから、31.3%の出現率になる。

(15) 北海道教育委員会『昭和55年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書無形民俗文化財6』P.11 1981

(16) 近江正一『アイヌ語から生まれた郷土の地名と伝説』、上川地区学校生活協同組合、1954年、64頁。

(17) 例えば、資料中の名称が「あかだも」あるいはアイヌ語の「チキサニ」となっている場合、データベース上はそのまま記入したが、出現総数をカウントする際には全て「はるにれ」の項にまとめた。

参考までに出現回数の多い10種を挙げれば、オオウバユリ69回、カヤ55回、ヤナギ53回、エゾマツ51回、ハルニレ42回、ヒエ40回<sup>(18)</sup>、サクラ40回、ハンノキ39回、ブドウ35回（果実と蔓の両方を含む）、シナノキ30回である。（同一の物語中に異なる役割で複数回出現してもここでは、1回とみなした。）

オオウバユリの場合、食料として出現するケースが多い（24回）のは、重要な食材であるという現実を反映したものと見えるが、その他「山にうばゆりを掘りに行くと…」というように物語の発端となる行動を意味するものとして出現する回数が46回と圧倒的に多いのは、ウバユリ掘りが女の山仕事の表徴と見なされていることを意味するといえるだろう。同じようにシナノキも衣服や道具の素材としてよりも「シナ剥ぎに行くと…」という文脈で出現する機会が多い。

エゾマツは51回中47回までが、「エゾマツの木の上に」等、場所を表す文脈で出現している。これはエゾマツが、道具材としての用途は限られるものの、野営の際に垂れ下がった枝の下で泊まったりすることから「精神の良い木」<sup>(19)</sup>としてシンボリックなイメージでとらえられていることと関連しているように思う。

サクラは全て道具材である桜皮としての出現に限られているが、エンカリ（耳輪）の材料にもなっているのは興味深い。

以上のような植物の出現状況のうち、植物神として登場するのは30種であり、口承文芸に出現する植物総数の20.3%、知里の項目数に対しては6.3%にすぎない。ここでいう植物神とは、(1)人間を救助したり逆に災いをもたらすなどストーリー構成に影響を及ぼす、(2)物語中でセリフを有する、(3)美しい衣装を身にまとうなど風貌が人間に似ている、等の人間的な特徴を有するものを意味し、人格植物神と呼ぶことにする。それゆえ、例えば「天上の神の妹神が福寿草になった」という起源説話の場合、転生後の福寿草にはさしたる人格は認められないから人格植物神としてはカウントしていない。また、芋の起源説話<sup>(20)</sup>には「イモカムイ」が現れるが、この場合は「おいしい食べ物の種 人間に食わせる 教えるために」「種持って天から降ろされた神さま」という分脈から、「イモ」そのものが神というよりも「イモ」を司る神のことを指すと判断したため、「イモ」は人格植物神として認めなかった。「マメ」<sup>(21)</sup>も同様である。

具体的な植物名は以下の通りである。

樹木…イチイ、エゾマツ、エンジュ、オヒョウ、カシワ、カツラ、カバ、クリ、クルミ、シナ、センノキ、ドロノキ、ナラ、ニワトコ、ハギ、ハルニレ、ハンノキ、ブドウ、ヤチダモ、ヤナギ

草本…アワ、イケマ、ウド、オオウバユリ、ギョウジャニンニク、コウライテンナンショウ、

(18) 和訳資料で「ひえ」と記されていても、アイヌ語原文はamamという穀物総称の場合が多いので、この数値だけで判断することは危険である。米田優子「アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要第1号』、北海道立アイヌ民族文化研究センター、1995年。

(19) 萱野茂『炎の馬』、すずさわ書店、1977年、277頁。同『アイヌの民具』、『アイヌの民具』刊行運動委員会、1978年、13頁。

(20) 萩中美枝他『聞き書アイヌの食事』、農山漁村文化協会、1992年、216頁。

(21) 同前、272頁。

コメ、トリカブト、ヒエ

他… マツヤニ

概して、これまでアイヌ生活誌に関する研究においても、日常生活に深く関わっているとみなされてきた植物が揃っているといえるだろう。なかでも人格植物神としての登場回数が多いのは以下の植物である。

ハルニレ<sup>(22)</sup>22回、トリカブト16回、カツラ10回、クリ9回、カシワ7回、ナラ6回、アワ6回、マツヤニ5回、ヤチダモ5回、オヒョウ5回、センノキ4回、エゾマツ4回。

ハルニレの登場回数が多いのは、オキクルミの誕生にまつわる物語が様々な文献で紹介されているためである。トリカブトは毒矢の使用というアイヌ独特の狩猟法に関わって、アイヌ文化では特別な位置を占めている。大きな熊神をも倒す毒性が神性と結びついたものと思われる。

オオウバユリは、植物としての出現回数が最も多かったにもかかわらず、人格植物神としては前述の起源説話に4回出現するのみである。エゾマツも4回出現するにすぎないが、登場した場合には非常に重要な役割を持つ神として描かれている。同じくヤナギも人格神としては2回登場するのみである。これはヤナギという植物が、神に捧げるイノウ材として強く認識されていることに原因があるのかもしれない。

ギョウジャニンニク、アワ、ヒエ、ウド等の食用植物や、マツヤニなどの狩猟道具に関連する植物は、現実の用途に即した役割をもって登場することが多い。

この他、データから生起する論点にはアイヌ生活誌研究の上でも興味深いテーマが多々含まれているが、またの機会に考察してみたい。

### III 各ジャンルにおける植物神のあらわれ方

#### (1) 神謡および散文説話における植物神の一人称叙述

先にあげた人格植物神の中でも、人格が最も象徴的な形で表れるのが、一人称叙述の語り手として登場する場合であり、現時点ではアワ、イチイ、ガマ、トリカブト、ヤチダモの5種<sup>(23)</sup>が確認されている。この他、パヨカカムイ（疫病神）と結婚し夫を衰弱させたキキンニ（エゾノウワミズザクラ）の女の散文説話<sup>(24)</sup>があるが、この場合は植物神の血統を引いているにすぎず、存在

(22) ネフスキー採集資料（ニコライ・ネフスキー／エリ・グロムコフスカヤ（編）／魚井一由（訳）『アイヌ・フォークロア』北海道出版企画センター、1991年）の中に、楡の木が「倒れ木の悪霊」として出現する。文献によっては楡がオヒョウを意味する場合もあり、アイヌ語原文を調べる必要があるが、現時点では筆者の判断でハルニレの方にカウントした。

(23) 久保寺逸彦によれば、この他、知里真志保採集の資料の中にオオウバユリとカツラの自叙による神謡があるらしい。（久保寺逸彦『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』、岩波書店、1977年、17頁）しかし、残念ながら今回『知里ノート』（北海道立図書館所蔵）を散見した限りでは確認できなかった。

(24) 萱野茂『カムイユカラと昔話』、小学館、1988年、274頁。

としてはあくまでも人間の女として描かれているのでカウントしていない。

以下、各々の植物神が一人称叙述体で語る口承文芸について、出典や特徴について述べることにする。

#### 1) アワ

出典：

① 瀧瀬あきの(伝承)、高橋規(訳註)「穂の小さな粟神の物語」『アイヌ民話 アイヌ無形民俗文化財伝承シリーズ1』、北海道教育委員会、1987年、97頁。

② 萱野茂『アイヌの民具』、アイヌ民具刊行運動委員会、1978年、202頁。

③ 萱野茂『おれの二風谷』、すずさわ書店、1975年、188頁。

- ・原文対訳資料は①のみであるが、いずれも昭和49年6月に瀧瀬あきのさん(新冠)<sup>(25)</sup>から収録したテープ(採録者 萱野茂)を原資料としている。

内容：穂が小さいために摘み残された小さな粟が人間を呼び、収穫してくれた老夫婦を幸福にした。

ジャンル：神謡

#### 2) イチイ

出典：「アララギの女神自叙の物語」 知里真志保『知里ノート』55(カムイユーカー)北海道立図書館所蔵

内容：和人の殿様がアララギ(=いちい)の女神をアイヌの女だと思い込み、家来に誘拐を命じた。女神は鳥男の注進により、とっさに軽石の女を身代わりに作って連れ帰らせた。殿様はアイヌの女が持つ巫術によるものだと思い諦めた。

ジャンル：アイヌ語原文は未見であるが、物語の形式から神謡であることはほぼ確実。

#### 3) ガマ

出典：岡本ユミ(伝承)「蒲の穂がなげいた昔話」『昭和55年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 無形民俗文化財6』、北海道教育委員会、1981年、52頁。

内容：昔アイヌの家の中では各神様の座す場所に敷物として立派な模様をつけて編まれた蒲だったが、和人がきてからは粗末に刈り取られ、ゾウリやワラジとして汚れた所を歩くので、蒲としては誠に残念だ。

ジャンル：不詳。

#### 4) トリカブト

トリカブトについては2つのパターンの口承文芸が残されている。

---

(25) 原資料がこのテープ一つにも関わらず、コミック本の石坂啓『ハルコロ』(潮出版社、1992年)にも引用されるなど、アイヌの世界観を示す物語として広く一般に知られている。

<パターン1>

出典：

- ①其浦コモンライ<sup>(26)</sup> (伝承)「トリカブトの歌」更科源蔵『アイヌ民話集 アイヌ関係著作集II』、みやま書房、1981年、271頁。
- ②更科源蔵『アイヌの神話 アイヌ関係著作集III』、みやま書房、1981年、64頁。
- ③日本放送協会(編)『アイヌ伝統音楽』、日本放送出版協会、1965年、480頁。

内容：毎日“さわったものは跳ねとばし さわったものはねじり伏せ”と歌いながらいたが人々は知らん顔をしていた。ある日サマイクルを従えたオキクルミがやってきて、礼拝してから私(とりかぶと)を掘りだし、以後、豊かな生活を送った。

ジャンル：①②は和訳資料のみであるが、伝承者等から判断していずれも③に掲載されている神謡と同じものと思われる。

<パターン2>

出典：

- ①鍋沢元蔵(筆録)「IMONKA-OYAN-MAT トリカブト姫」『アイヌの叙事詩』、門別町郷土史研究会、1969年、405頁。
- ②西島てる(伝承)『昭和55年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書無形民俗文化財6』、北海道教育委員会、1981年、38頁。

内容：トリカブトの女神がアイヌラックル(②ではオキクルミ)の妻になる。

ジャンル：①は、同資料の解説部分に「神姫の menoko-yukar であるが、kamuy oyna ともしうべきものであろう」という記述がある。②は「ウウエベケレ」とされている。

5) ヤチダモ

出典：杉村キナラブック(伝承)「けなしたオキクルミには肉を固くし、誉めた国造りの神には肉を柔らかくした、やちだもの自叙」、中川裕(校訂)大塚一美(編訳)、『キナラブック口伝アイヌ民話全集』、北海道出版企画センター、1990年、199頁。

内容：私(やちだも)を「性悪のくされ木」と呼んだオキクルミに対しては、固い肉を外に出して伐らせなかったが、重く礼拝したサマイエクルに対しては柔らかい肉を外に出して切り倒させ、立派な舟を造らせた。

ジャンル：神謡

以上の点をまとめてみると、やはりその多くが神謡とよばれるジャンルの中で登場していることがわかる。では、神謡以外のジャンルに属する「ガマ」および「トリカブト」の例について、もう少し検証してみることにする。

(26) 同書では「コモンライ」とあるが、正しくは「コモンライ」だと思われる。『エカシとフチ 資料編 文献上のエカシとフチ』、札幌テレビ放送株式会社、1983年、38頁。および日本放送協会(編)『アイヌ伝統音楽』、日本放送出版協会、1965年、549頁。

「穂の穂がなげいた話」にはジャンル名が記されていないが、その形式から散文説話だと考えられる。しかし、内容的にはかなり特異な例だといえる。口承文芸にあらわれる和入描写の類型については中川裕が興味深い論考<sup>(27)</sup>をまとめているが、この物語はその中のどの類型にもあてはまらず、一般的には今回対象とした口承文芸のジャンル外で語られる内容であるように思う。

トリカブトの女神についての西島てるさん（平取町荷負本村）の伝承は、「ウウエベケレ」だとされているが、類話である「IMONKA-OYAN-MAT」の方にはジャンル名として「menokoyukar」あるいは「kamuy oyna」という語が記されている。しかも、この物語を所収している『アイヌの叙事詩』は、全体としては英雄叙事詩を中心に編まれている文献である。それゆえ、トリカブト神に関する伝承も決して一般的な散文説話とみなすことはできないように思われる。

以上のような点から筆者は、人格植物神による一人称叙述というパターンは原則的には散文説話において存在しないのではないかと推論するに至った。

ところで従来、散文説話の中でも、神が叙述する物語は「kamuy uwepeker」と呼ばれてきた。この「kamuy uwepeker」について、金田一京助の場合は単に「特に神々に関したものと述べているにすぎない<sup>(28)</sup>」が、久保寺逸彦は「神々が自ら自分の身の上を述べる昔話<sup>(29)</sup>」だと定義しており、同じく知里真志保も「散文物語のうち、神が主人公になって自分のことを述べる形式になっているものを言う<sup>(30)</sup>」と記している。しかし、先に述べたような論が成立するならば、少なくとも久保寺や知里が想定するような植物神を主人公とする「kamuy uwepeker」は存在しないということになる。

これを裏付ける一つの例として、粟の散文説話について考えてみたい。

実は、前述の「穂の小さな粟神の物語」には類話が二つある。一つは吉田巖が紹介している「粟ものがたり」<sup>(31)</sup>であり、十勝フシコベツ出身の田村吉郎による筆録資料に基づいている。もう一つは更科源蔵の「アワのとりもつ縁」<sup>(32)</sup>であり、八雲の椎久トイタレケの伝承によるものである。いずれも、オタスツの男が猟に行く途中で泣いているアワを見つけ、近くに住む女と老婆に頼んで刈り取ってもらった後、その家の婿になったという内容であり、伝承地が遠く離れているにもかかわらず細部に至るまでおどろくほど類似している。したがって「穂の小さな粟神の物語」とは多少異なるストーリー展開をもつものの、摘み残された粟が泣いて訴え、摘み採ってくれた人間に幸福をもたらすという主題は一致している。しかし、神話である「穂の小さな粟神の物語」の方は粟が一人称叙述の語り手であるのに対し、「粟ものがたり」並びに「アワのとりもつ縁」は、

(27) 中川裕「口承文芸に見るアイヌ人と和入との関係」、北方言語・文化研究会編『民族接触—北の視点から—』、六興出版、1989年。

(28) 金田一京助「アイヌの神話」『アイヌの研究』、内外書房、1925年（『金田一京助全集』第七巻、三省堂、1992年、98頁）

(29) 久保寺逸彦『アイヌの文学』、岩波書店、1977年、185頁。

(30) 知里真志保「アイヌの散文物語」『北方文化研究報告第十輯』、北海道大学、1955年、254頁。

(31) 吉田巖「昔話」『愛郷譚叢<アイヌ古事風土記資料>』帯広市社会教育叢書No.3、帯広市教育委員会、1957年、101頁。吉田はこの他にもいくつかの文献に同資料を掲載している。

(32) 更科源蔵『アイヌ民話集 アイヌ関係著作集II』、みやま書房、1981年、259頁。

三人称叙述という特殊な形式<sup>(33)</sup>をとっている。

ところが、吉田巖は「粟ものがたり」を所収している「昔話」の前書きにおいて次のように記している。「元来アイヌの民間説話即民譚は…(略)1人称の説話が本体…(略)であり、その実歴談が普通なのである。本稿には当初からわかり易く3人称に説述されたことをことわっておく」。すなわち、和訳資料だけでは、吉田が手を加えたため叙述形式が変わった例なのか、それとも本来的に三人称叙述だったのか判断がつかない。そこで、田村吉郎のアイヌ語原文資料を捜したところ、『吉田巖遺稿資料』<sup>(34)</sup>の中に所収されており、「オタシタオカアンハ／ランマノ／イキミネアンハ／ケライボ…」で始まる、オタスツの男の自叙という一般的な形式にすぎないことがわかった。更科の資料についてはアイヌ語原文の確認ができていないため、本来の形式は不明である。

ともあれこれまで述べたような点から、筆者は現時点で以下のような仮説を立てた。すなわち、動物神やその他の器物神に比べ、植物神が一人称叙述形式で語る物語は数としても少ないが、神謡というジャンルの中では明らかに成立する。しかしその場合も、アイヌの現実生活においても非常に重要な位置を占める植物に限定される。一方、散文説話においては植物神の自叙は原則的には認められにくい。そのため、同一の物語が散文説話の形式で語られる場合は、新たに人間の主人公を創出してその人間の自叙という形式を取り、植物神はストーリー上重要な役割を持つ登場者という位置に転ずる。

仮に口承文芸のジャンルごとにこのようないくつかの拘束力が働いているとすれば、すくなくとも「私の父は…(略)大きなカシワの木で…(略)母は父よりももっとも大きなカシワの木で…(略)私はその木のいちばん上の枝になったドングリです」<sup>(35)</sup>と始まるような散文説話は、かつてのアイヌ口承文芸の中には存在しないことになる。

## (2)英雄叙事詩にあらわれる植物神

次に英雄叙事詩について検討してみたい。英雄叙事詩においては、これまでに2種類の植物神の登場が確認されるのみである。

「ハルニレの女神」は、オキクルミ(アイヌラックル)の誕生にまつわる物語の中で登場するが、これは従来、金田一京助、久保寺逸彦の著書で「オイナ」として紹介されており、英雄叙事詩としては早稲田大学語学教育研究所の『アイヌ語音声資料』に記載された例に限られる。この場合は、伝承者の平賀サダモさん自身が「ユカラ」と呼んでいた<sup>(36)</sup>ため、ユカラというタイトルがつ

(33) 三人称叙述形式について久保寺は前掲の『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』の中で次のように述べている。「アイヌの散文文学中、第三人称叙述形式をとるものの主なるものは、僅かに、Shisam-uwepeker『和人昔話』とPanampe-uwepeker『川下の者の昔話』等であるところを見れば、この種のものは、第一人称叙述の散文文学より遅れて発達したと見做すべきではないか」。その他、中川裕「アイヌ散文説話における外来的要素と人称」『日本文学』Vol.42、日本文学協会(編)、1993年1月。

(34) 吉田巖『吉田巖遺稿資料』No.134 北海道立図書館収蔵

(35) 萱野茂「創作民話 ドングリとカラス」『炎の馬』、すずさわ書店、1977年。

(36) 田村すず子、『アイヌ語音声資料』7、早稲田大学語学教育研究所1991年、1頁。

けられたものだが、考慮すべき点を多く含んでいる。

「エンジュの神」は、『金成まつユーカラ集』<sup>(37)</sup> 中の「29 Yirap, Pon chikupeni kamui Otasam kotan kikkar」に登場する。この物語は北海道教育委員会から日本語対訳が刊行されており<sup>(38)</sup>、タイトル日本語訳は「若きチクベニ神がオタサム村を撃つ物語」となっている。このため、悪神であるかのような印象をもってしまうが、物語では熊神と共に主人公を助けてオタサム村を守るための良神として登場する。参考までに記すが、これは前述の『金成まつユーカラ集』目録<sup>(37)</sup>では「ヤイラブ『若いチリベニ神がオタサム村を防ぐ曲』』という日本語タイトルになっており、その方がストーリーに即している。「身代わりになって防ぐ、防御する」という意味での“kikkar”については知里真志保が詳しく述べているが<sup>(39)</sup>、“kikkar”も“kikikar”同様の意味をもつ<sup>(40)</sup>。一応『金成マツ筆録ユーカラ・ノート』<sup>(41)</sup>のアイヌ語原文を確認したところ、タイトル並びに本文中の語句はいずれも“kikkar”であり、タイトルの日本語訳は「撃つ」の方になっている。

いずれにせよ金成マツも「エンジュの神」の登場がこの物語の際だった特徴と考えたからこそ、救援にきた三者（狼神の妹、エンジュの神、熊神）のうち植物神のみをタイトルに掲げたと考えられる。また、この物語は「yairap」と位置づけられている。金成マツが「yairap」をどのように定義していたのか筆者には不明であるが、この物語を典型的な英雄叙事詩<sup>(42)</sup>と見なすことにはためらいを感じる。

このようにみると、英雄叙事詩の中に人格植物神が登場する例はむしろ特異な例といえるのではないだろうか。

もっとも、神としての存在ではない植物ならば、英雄叙事詩においても21種類出現する。その中でも特に、比喩等の常套表現の中で植物名があらわれるケースが非常に多いのが特徴といえる。「燃えている樺皮がからみつくような(痛さ)」、「踏みつぶされた芽のように」、「水に潰かった昆布のような(顔色)」、「どんぐりが落ち転がるように(家に入る)」、「福寿草の花の滴のような(獣の目の色あるいは輝く宝)」などは、その代表例といえる。この他、「やせたヨモギを折り取ったような醜い女」という表現もある。

この点については、同一の伝承者による口承資料のうち、英雄叙事詩とそれ以外のジャンルでの比喩表現を比較することでも確認でき、興味深い論点ではあるが、ここでは紙幅の関係もありまたの機会に譲りたい。

(37) 金成まつ(筆録)/金田一京助(訳注)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』I、三省堂、1959年、1頁。

(38) 北海道教育委員会『若きチクベニ神がオタサム村を撃つ物語』アイヌ民族文化財ユーカラシリーズ VII、1995年。

(39) 知里真志保『分類アイヌ語辞典』第1巻植物篇、日本常民文化研究所、1953年、119頁。

(40) Batchelor, John 『AN AINU-ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY』、岩波書店、1938年、251頁。

(41) 金成マツ『金成マツ筆録ユーカラ・ノート』北海道立図書館所蔵マイクロフィルム HM406 45頁。

(42) 金田一は『ユーカラ概説』(青磁社、1943年、191頁)の中で、ユーカラの変種としてのヤイラブについて述べており、ユーカラ同様に「少年英雄の戦物語」であり「ヒーローがボイヤウンベの代わりにオタサムンクルと呼ばれるだけの相違」だとしている。しかし、この金成マツ筆録yairapのヒーローはオタスツの少年である。

以上、述べてきたような植物神ならびに植物の出現のしかたに関する仮説を表にまとめると以下のようになる。

	一人称叙述神	人格植物神	植物 (非人格)
神 話	○	○	○
散 文 説 話	×	○	○
英雄叙事詩	×	×	○

ただし、これはあくまでも出現のしかたを数値としてまとめ、そこから考察した仮説にすぎない。なぜこのような出現形態をとるのかという点については、アイヌ口承文芸におけるジャンル区分とその性格に関する研究の深化をまたなければならない。また、植物だけでなく人格動物神に関する研究を深める過程で、動物と植物に対する認識の相違をも明らかにしてゆかねばならないだろう。

## おわりに

ここで、本稿での論点をもう一度まとめてみたい。

まず、口承文芸の資料性について考察してみた。結論として、口承文芸の中から植物の加工法や利用法等の詳細な情報を得ることは難しく、その分野の資料としては一定の限界を持つ。しかし、それは口承文芸資料の総体としての有用性を否定するものでは決してない。むしろ、これまで生活誌研究の分野で、物語中のデータが十分活用されてこなかったことを考えれば、口承文芸資料の活用は研究の広がりや深化をもたらしてくれることは間違いない。そのためには、資料性を見極める研究者側の力量が問われる。アイヌ語原文に立ち戻ることは基本的な原則であるが、研究目的によっては、なにを一次資料とみなすかも変化する。その意味で口承文芸の資料性に関しては、今後も引き続き考えていきたい。

次に、口承文芸にあらわれる植物と植物神について、具体的な植物名をあげて検討した。その上で、各ジャンルごとの植物神登場の特徴について考察し、以下のような仮説をたてた。①神話の一人称叙述の語り手となりうる植物神は、アイヌ文化の中で重要な地位をしめているごく一部の植物に限られる。②散文説話には植物を主人公とする kamuy uwepeker は存在しない。③植物神が自叙する神話が同じストーリーをもつ散文説話に変型する場合、形式上は人間の主人公による自叙という形式に転じる。④英雄叙事詩には、植物神も登場しない。

もっともこの仮説は、巻末に提示した文献資料に基づく限られたデータから導きだしたものにはすぎない。今後、未見の資料をデータ化する中で、あるいは新たな資料が公開される中で、大幅な修正が迫られる可能性もおおいにある。それゆえ本稿はあくまでも、今後の研究のための基礎的論考にすぎず、引き続き検討を加え、論を重ねていきたいと考える。

〈データ作成にあたり利用した文献〉：目を通したが植物名が記載されていない資料については省いた  
アイヌ無形文化伝承保存会（編）『神々の物語』、1981年。

————『英雄の物語』、1982年。

————『人々の物語』、1983年。

————『アイヌの民話 1』、1983年。

————『アイヌの民話 2』、1985年。

————『語りの中の生活誌』、1986年。

————『アイヌ文化』8号、1983年。

浅井 亨（編）『アイヌの昔話』、日本放送出版協会、1972年。

————『日本の民話』、ぎょうせい、1979年。

伊藤裕満「川上まつ子さんの神謡 雷神の自叙伝」『アイヌ民族博物館研究報告』第三号、アイヌ民族博物館、1989年。

上野ムイテクン（口述）／森竹イタクノト（口訳）「アイヌ伝承ウエベケル kanna-kamuy tsuresi」『北海道の文化』7、北海道文化財保護協会、1964年。

扇谷昌康「オキクルミの自ら語った昔話」、発行元不詳、1968年。

近江正一『アイヌ語から生まれた郷土の地名と伝説』、上川地区学校生活協同組合、1954年。

太田コウンテカン（口述）／魚井一由（筆録・翻訳）「太田コウンテカン オイナ・トゥイタック集」『市立旭川郷土博物館研究報告』第14号、1983年。

————「2.山アイヌとベナンベ」「3.夫の謎かけ」「4.女の勘」『市立旭川郷土博物館研究報告』第19号、1991年。

————「1.神魚と悪戯っ子」「2.復讐」『市立旭川郷土博物館研究報告』第20号、1992年。

奥田統己「アイヌ口承文芸(2)上田トシさん口演『犬の子供をみごもった女の物語』」『札幌学院大学人文学会紀要』第48号、札幌学院大学人文学会、1990年。

萱野 茂『ウエベケレ集大成』、アルドオ、1974年。

————『キツネのチャランケ』、小峰書店、1974年。

————『炎の馬』、すずさわ書店、1977年。

————『カムイユカラと昔話』、小学館、1988年。

————『アイヌの昔話 ひとつぶのサッチポロ』、平凡社、1993年。

川上まつ子（語り手）／北市哲男（絵）／中村齋（文）『ポロシルンカムイになった少年』、(財)白老民族文化伝承保存財団・アイヌ民族博物館、1986年。

金成マツ『金成マツ筆録ユーカラ・ノート』HM407(8)、北海道立図書館マイクロフィルム

金成まつ（筆録）／金田一京助（訳注）『アイヌ叙事詩ユーカラ集』Ⅰ～Ⅶ、三省堂、1959年～1966年。

金田一京助『日本昔話集 下』、アルス、1929年。

————（筆録・訳注）『アイヌ叙事詩ユーカラ集』Ⅷ（1968年）Ⅸ（1975年）、三省堂。

————『金田一京助全集』第7巻～第11巻、三省堂、1993年。

工藤梅次郎『アイヌ民話』、工藤書店、1926年。

久保寺逸彦『アイヌの昔話』、三弥井書店、1971年。

————『アイヌの文学』、岩波書店、1977年。

————『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』、岩波書店、1977年。

古原敏弘「ウエベケレーアイヌの口承文芸—食べものについての物語」萩中美枝他『聞き書 アイヌの食事』、農山漁村文化協会、1992年。

- 佐々木長左衛門『アイヌの話』、旭屋書店、1922年。
- 札幌テレビ放送株式会社『サコロベの世界』、1978年。
- 更科源蔵『アイヌ民話集 アイヌ関係著作集II』、みやま書房、1981年。
- 『アイヌの神話 アイヌ関係著作集III』、みやま書房、1981年。
- 更科由利子(編)『八重九郎民話伝説』(ガリ版刷資料)、1974年。
- 静内町教育委員会『静内地方の伝承』I～V、1991年～1995年。
- 清水重道『アイヌの神話と伝説』、同和春秋社、1955年。
- 杉村キナラブック『キナラブック・ユーカラ集』旭川叢書第3巻、旭川市、1969年。
- 知里真志保『分類アイヌ語辞典』第1巻 植物篇、日本常民文化研究所、1953年。
- 『ユーカラ鑑賞』、潮文社、1968年。
- 『知里真志保著作集』1～2、平凡社、1973年。
- 『樺太アイヌの神話』『北方文化研究報告』第八輯、北海道大学、1953年、(『北方文化研究報告』4、思文閣出版、1987年)。
- 『知里ノート』55～56、北海道立図書館収蔵複写資料
- 知里真志保(監修)/児童図書研究会(編)『北海道のむかし話』、みやま書房、1956年
- 知里幸恵『アイヌ神話集』、郷土研究社、1923年。
- 『故知里幸恵嬢遺稿』『市立旭川郷土博物館研究報告』No.5、市立旭川郷土博物館 1968年。
- 中川 裕(校訂)/大塚一美(編訳)『キナラブック口伝アイヌ民話全集』、北海道出版企画センター、1990年。
- 中田千畝『アイヌ神話』、報知新聞社、1924年。
- 鍋沢元蔵(伝承)/扇谷昌康(脚注)「カムイ・ユーカラ 雷神の自ら歌った神謡」『北海道の文化』13、北海道文化財保護協会、1967年。
- ニコライ・ネフスキー/エリ・グロムコフスカヤ(編)/魚井一由(訳)『アイヌ・フォークロア』、北海道出版企画センター、1991年。
- 日本放送協会(編)『アイヌ伝統音楽』、日本放送出版協会、1965年。
- 貫塩喜蔵『アイヌ叙事詩サコロベ』、白糖町、1978年。
- 萩中美枝/織田ステノ(語り)「ユーカラへの誘い」『アイヌ文化に学ぶ』、札幌学院大学、1990年。
- 蓮池悦子「『小母が草の小舟にわたしを乗せて流す』メノコユーカラのこと」『北海道の文化』55、北海道文化財保護協会、1986年。
- B・ピウスツキー/北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会(訳)「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料」〈2〉、『創造の世界』第47号、小学館、1983年。
- 「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料」〈8〉、『創造の世界』第53号、1985年。
- 「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料」〈10〉、『創造の世界』第55号、1985年。
- 「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料」〈13〉～〈15〉、『創造の世界』第58号～第62号、1986年～1987年。
- 藤村久和・若月亨(共訳)「食物を分け惜しんだことから毛色が赤くなってしまったキタキツネの神の物語 アイヌの神々の物語〈第6話〉」『創造の世界』第93号、小学館、1995年。
- 北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書』(無形民俗文化財)1～6 1976年～1981年。
- 『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ』I～Ⅷ、1979年～1996年。
- 『アイヌ民俗文化財調査報告書』I～Ⅳ、1982年～1996年。
- 『アイヌ民話』アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ1、1988年。

- 『オйна（神々の物語）1』 アイヌ民俗文化財記録刊行シリーズ3、1990年。
- 『オйна（神々の物語）2』 アイヌ民俗文化財記録刊行シリーズ5、1992年。
- 『オйна（神々の物語）3』 アイヌ民俗文化財記録刊行シリーズ7、1994年。
- 『トゥイタタ（昔語り）1』 アイヌ民俗文化財記録刊行シリーズ9、1996年。
- 『八重九郎の伝承』、1993年。
- 『八重九郎の伝承』（2）～（3）、1994年～1995年。
- ボン・フチ『アイヌ語は生きている』、新泉社、1976年。
- 『ユーカラは甦る』、新泉社、1978年。
- 松元竹二『朝鮮台湾アイヌ童話集』、近代社、1929年。
- 三木唯史『美幌のユーカラ』、美幌町、1977年。
- 門別町郷土史研究会（編）『アイヌ叙事詩クドネシリカ』、1965年。
- 『アイヌの叙事詩』、1969年。
- 山本多助『カムイ・ユーカラ アイヌ・ラックル伝』、平凡社、1993年。
- 吉田 巖『愛郷譚叢＜アイヌ古事風土記資料＞』帯広市社会教育叢書No.3、帯広市教育委員会、1957年。
- 早稲田大学語学教育研究所（編）『アイヌ語音声資料』1～9、1984年～1994年。（3以降は田村すず子著  
あるいは編著）

## Plants and Plant Deities in Ainu Oral Literature

HONDA Yuko

### Summary

In what ways did the Ainu understand plants? It is often suggested that in the Ainu worldview all things were regarded as possessing a god-like spirit. It seems, however, that in reality only certain plants were regarded as gods. It is necessary therefore to have a correct understanding of what kinds of plants were seen in this way. As a preliminary step, the author examined Ainu oral literature and collected 1,803 references to plants.

In this paper, the author first considers the nature and limitations of Ainu oral literature through a famous tale about the *turēp* (Cardiocrinum glehni Makino).

Secondly, the author confirms what plants were personified as gods. There are several hundred plants that are named in the Ainu language. According to the author's data, 148 kinds of plants appear in Ainu oral literature, and of these, 30 are personified as gods.

Thirdly, the author considers the characteristics of the ways in which plants and plant deities appear in the three main genres of Ainu oral literature.

The following hypotheses are presented :

- 1) The Plant Gods who recite tales about themselves in Songs of Gods are limited to a few specially important plants.
- 2) Plant Gods who recite their own tales in which they are the hero do not appear in *Kamuy uwepeker* (prose tales of gods).
- 3) If a Song of the Gods recited by a Plant God changes into a prose tale, the tale then becomes recited in the first person by a different human hero.
- 4) Plant Gods do not appear in the heroic epics.

**Key Words** : Ainu oral literature, ethnobotany, attitudes towards plants, plant beliefs, plant utilization